

4. 2. 事後調査の結果

4.2.1. 水質（地下水の水質を除く）

4.2. 事後調査の結果

4.2.1. 水質（地下水の水質を除く）

水質（地下水の水質を除く）について、工事の実施による影響（コンクリート打設工事及び地盤改良によるアルカリ排水の影響、土地の造成及び工事用道路等の建設に伴う濁水の影響）を把握するために調査を実施した。

(1) 調査項目

- ・生活環境項目
- ・一般観測項目

(2) 調査地点

図 4.2.1-1 に示す対象事業実施区域及びその周辺の 6 地点とした。

(3) 調査時期・頻度

調査は年 12 回（毎月 1 回）実施した。調査時期を表 4.2.1-1 に示す。

表 4.2.1-1 調査時期

調査項目	調査日	調査時間	天候
水質 ・生活環境項目 ・一般観測項目	2024年 4月26日	8:00～16:00	曇り
	2024年 5月24日	8:00～16:00	晴れ
	2024年 6月25日	8:00～16:00	曇り
	2024年 7月25日	8:00～16:00	晴れ
	2024年 8月21日	8:00～16:00	晴れ
	2024年 9月13日	8:00～16:00	晴れ
	2024年10月15日	8:00～16:00	曇り
	2024年11月12日	8:00～16:00	晴れ
	2024年12月17日	8:00～16:00	晴れ
	2025年 1月 9日	8:00～16:00	晴れ
	2025年 2月 6日	8:00～16:00	晴れ
	2025年 3月 3日	8:00～16:00	曇り

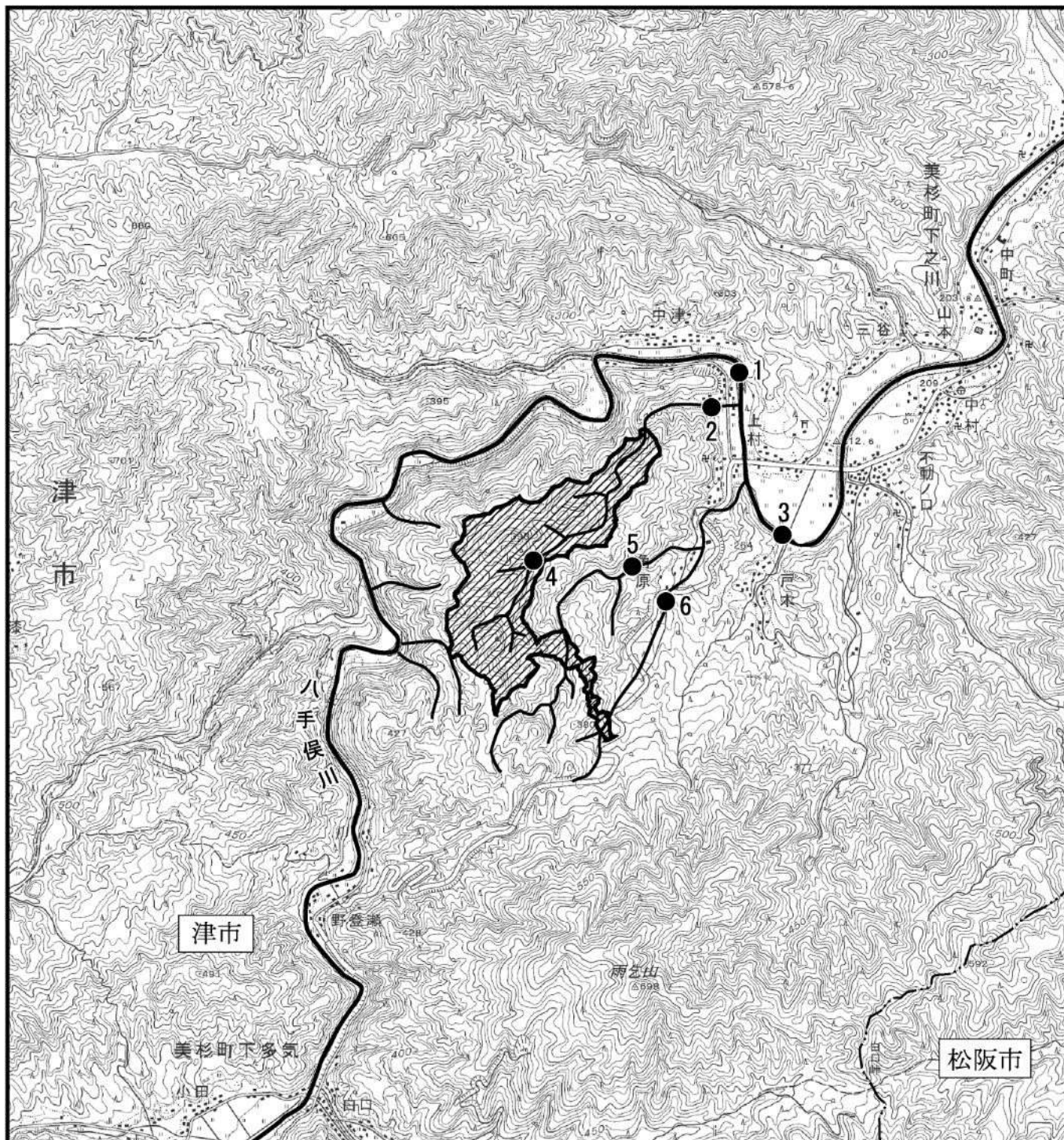
(4) 調査方法

現地にて採水を行い、環境庁告示に定める方法により室内分析を実施した。また、流量については流速計もしくは容器法等により観測した。

調査項目及び分析方法等を表 4.2.1-2 に示す。

表 4.2.1-2 調査項目及び分析方法等

調査項目		分析方法等
生活環境項目	水素イオン濃度 (pH) 浮遊粒子状物質 (SS) 生物化学的酸素要求量 (BOD) 化学的酸素要求量 (COD) 溶存酸素量 (DO) 大腸菌群数 (最確数法) 大腸菌数※ 全窒素 (T-N) 全磷 (T-P)	「水質汚濁に係る環境基準について」(昭和 46 年環境庁告示第 59 号) 及び日本工業規格 K0102 (工場排水試験方法) ※大腸菌数は「3. 八手俣川下流」のみ実施
一般観測項目	気温 水温 電気伝導率 (EC)	日本工業規格 K0102 (工場排水試験方法)
	流量	「水質調査方法」(昭和 46 年環水管第 30 号環境庁水質保全局)



凡 例



: 対象事業実施区域



: 市 界



: 八手俣川及び沢



: 水質調査地点 (1~6)

1. 八手俣川上流 (※対象事業実施区域からの流入なし)
2. 八手俣川合流前
3. 八手俣川下流
4. 調整池下
5. 取水施設 1
6. 取水施設 2



1:25,000

0 0.5 1km

図 4.2.1-1 調査地点位置
(水 質)

(5) 調査結果

項目ごとの水質調査結果を表 4.2.1-3 に、期間変動を図 4.2.1-2～図 4.2.1-14 に示す。

表 4.2.1-3 水質調査結果

調査項目	調査結果
水素イオン濃度 (pH)	- pH は 7.4～8.4 - 全ての地点・月において、環境基準 (pH6.5～8.5) の範囲内 - 農業用水基準 (pH6.0～7.5) の範囲外となる場合が多いが、この傾向は工事前調査と同様 - 工事前調査と比較すると、概ね工事前調査の出現範囲内
浮遊物質 (SS)	- SS は 1～12mg/L - 全ての地点・月において、環境基準 (25mg/L 以下) の範囲内 - 全ての地点・月において、農業用水基準 (100mg/L 以下) 未満 - 工事前調査と比較すると、概ね工事前調査の出現範囲内
生物化学的酸素要求量 (BOD)	- BOD は 0.5～1.9mg/L 3 月に 2. 八手俣川合流前、4. 調整池下、5. 取水施設 1、6. 取水施設 2 の地点で環境基準 (1.0mg/L 以下) を超過したが、その下流地点の 3. 八手俣川下流では環境基準以下 - 工事前調査と比較すると、概ね工事前調査の出現範囲内
化学的酸素要求量 (COD)	- COD は 0.6～5.7mg/L - 多くの地点・月において、環境基準 (1.0mg/L 以下) を超えたが、この傾向は工事前調査と同様 - 全ての地点・月で農業用水基準 (6.0mg/L) 以下 3 月に 5. 取水施設 1 で工事前調査の出現範囲を上回っていたが、その下流地点の 3. 八手俣川下流では工事前の出現範囲内 - 工事前調査と比較すると、概ね工事前調査の出現範囲内
溶存酸素量 (DO)	- DO は 7.5～14.0mg/L - 全ての地点・月において、環境基準 (7.5mg/L 以上) に適合 - 全ての地点・月において、農業用水基準 (5.0mg/L 以上) に適合 - 工事前調査と比較すると、やや低いまたは概ね同様であった。
大腸菌群数	- 大腸菌群数は 4.5～27,000MPN/100mL - 年間を通して環境基準 (50MPN/100mL) を超えていたが、この傾向は工事前調査と同様 - 工事前調査と比較すると、概ね工事前調査の出現範囲内
大腸菌数	- 大腸菌数は 17～450CFU/100mL - 多くの月において、環境基準 (20 CFU/100mL 以下) を超える値を示した。 ※R4 年度から実施、3. 八手俣川下流のみ
全窒素 (T-N)	- T-N は 0.09～0.63mg/L - ほとんどの地点・月において、環境基準 (0.1mg/L 以下) を超えていたが、この傾向は工事前調査と同様 - 全ての地点・月において、農業用水基準 (1.0mg/L 以下) 以下 - 工事前調査と比較すると、概ね工事前調査の出現範囲内
全リン (T-P)	- T-P は 0.003～0.036mg/L - 多くの地点で環境基準 (0.006mg/L) を超えていたが、この傾向は工事前調査と同様 - 工事前調査と比較すると、2. 八手俣川合流前、4. 調整池下で逸脱する値を示す月がみられたが、概ね工事前調査の出現範囲内
気温	- 気温は 0.8～33.0℃ 7～8 月に高い値がみられたが、概ね工事前調査の出現範囲内
水温	- 水温は 1.4～25.6℃ - 夏季に工事前調査の出現範囲を超える値、冬季に下回る地点がみられた。
電気伝導率 (EC)	- 電気伝導率は 7.5～29.1mS/m - 全ての地点・月において、農業用水基準 (30mS/m 以下) 未満 - 工事前調査と比較すると、4. 調整池下で逸脱しているが、その他の地点では概ね工事前調査の出現範囲内
流量	- 流量は 0.001～2.860m³/s - 工事前調査と比較すると、工事前調査の出現範囲内

注1) 基準値について：八手俣川には環境基準の類型指定はされていないため、pH、SS、BOD、大腸菌群数は下流の雲出川上流の類型である河川AA類型の基準値を参考とした。また、CODは湖沼AA類型、T-N、T-Pは湖沼I類型を参考とした。

注2) 表中の調査結果は、2024年度調査期間を指す。

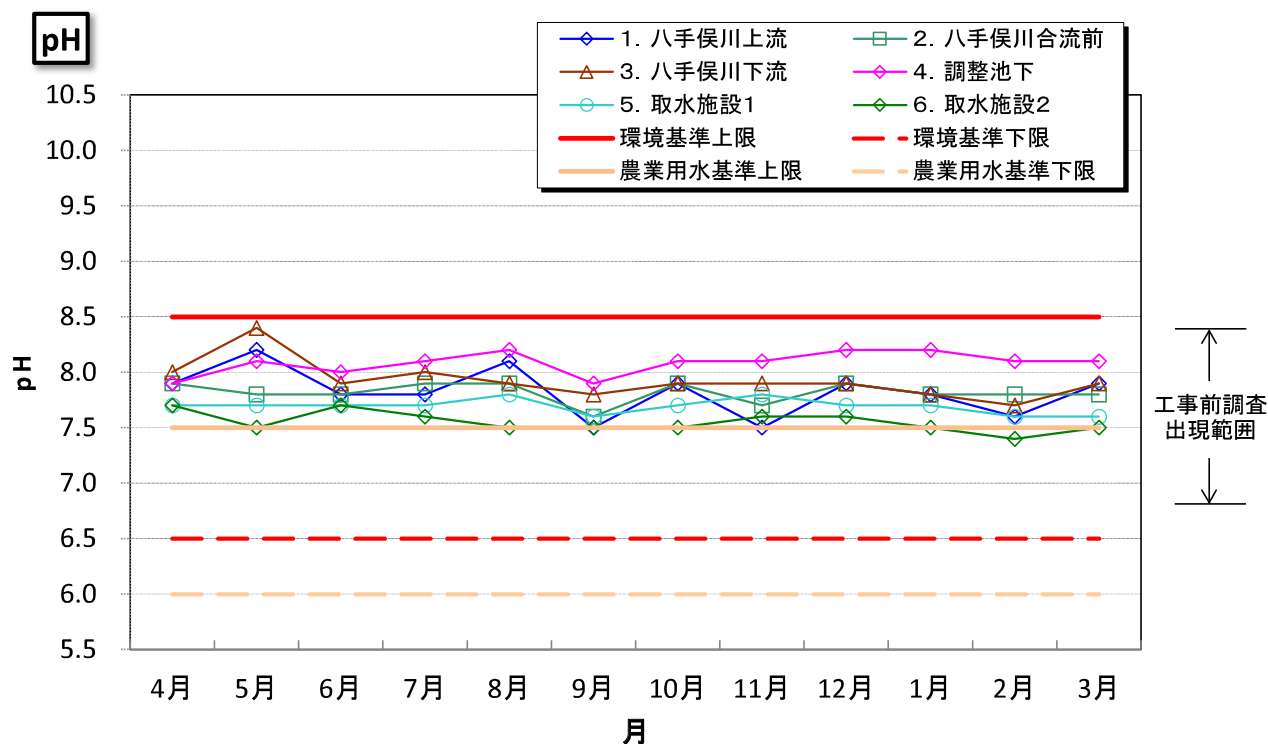
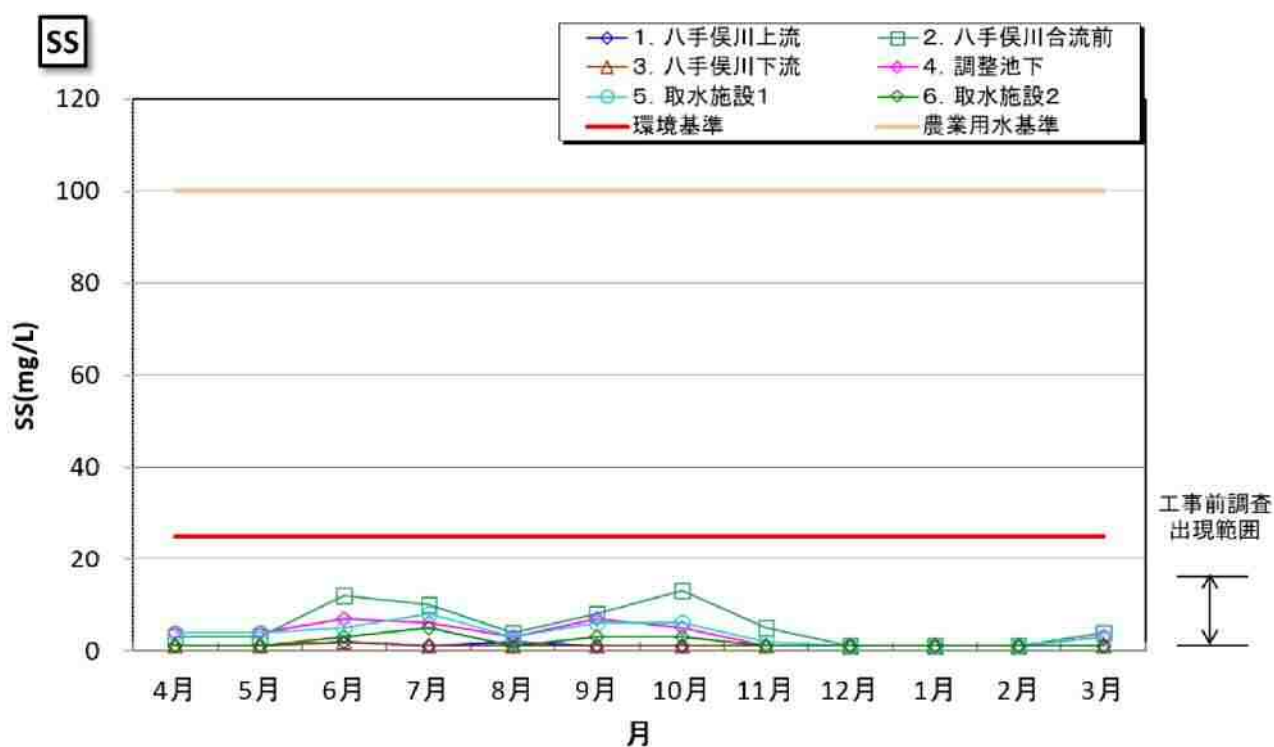
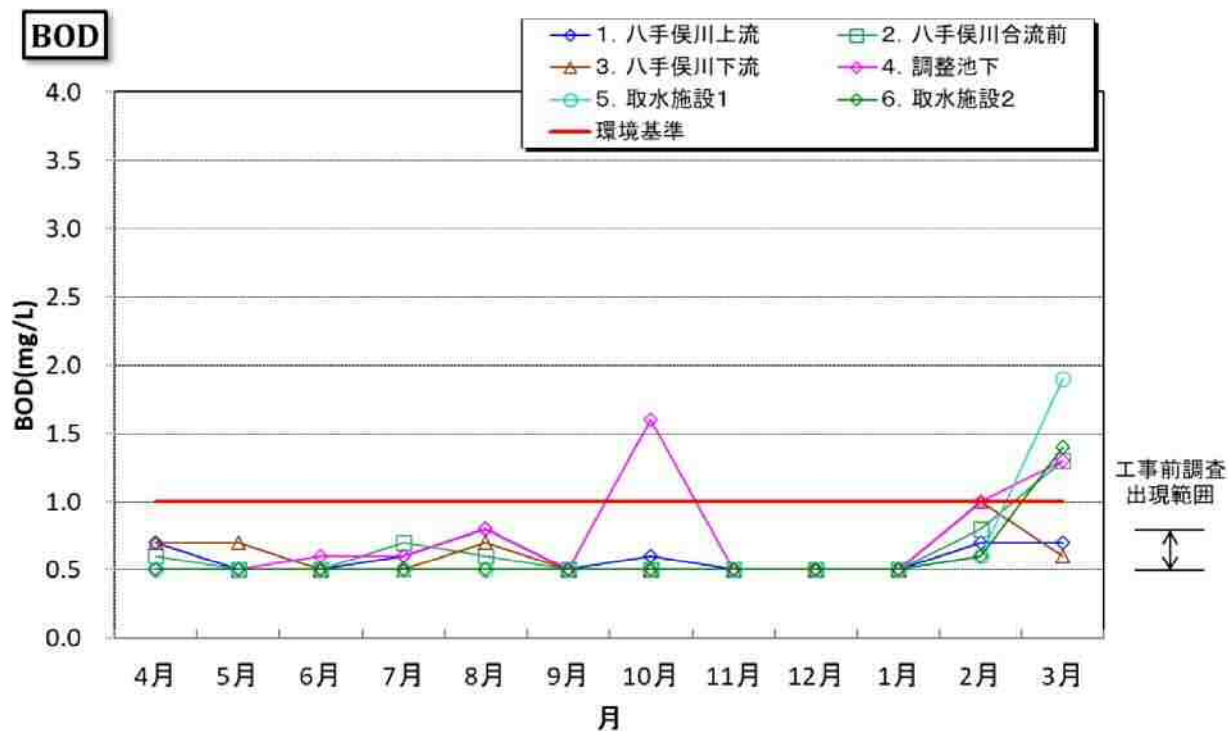


図 4.2.1-2 水質調査結果 (pH)



注) 値が定量下限値未満の場合は、定量下限値として表記した。

図 4.2.1-3 水質調査結果 (SS)



注) 値が定量下限値未満の場合は、定量下限値として表記した。

図 4.2.1-4 水質調査結果 (BOD)

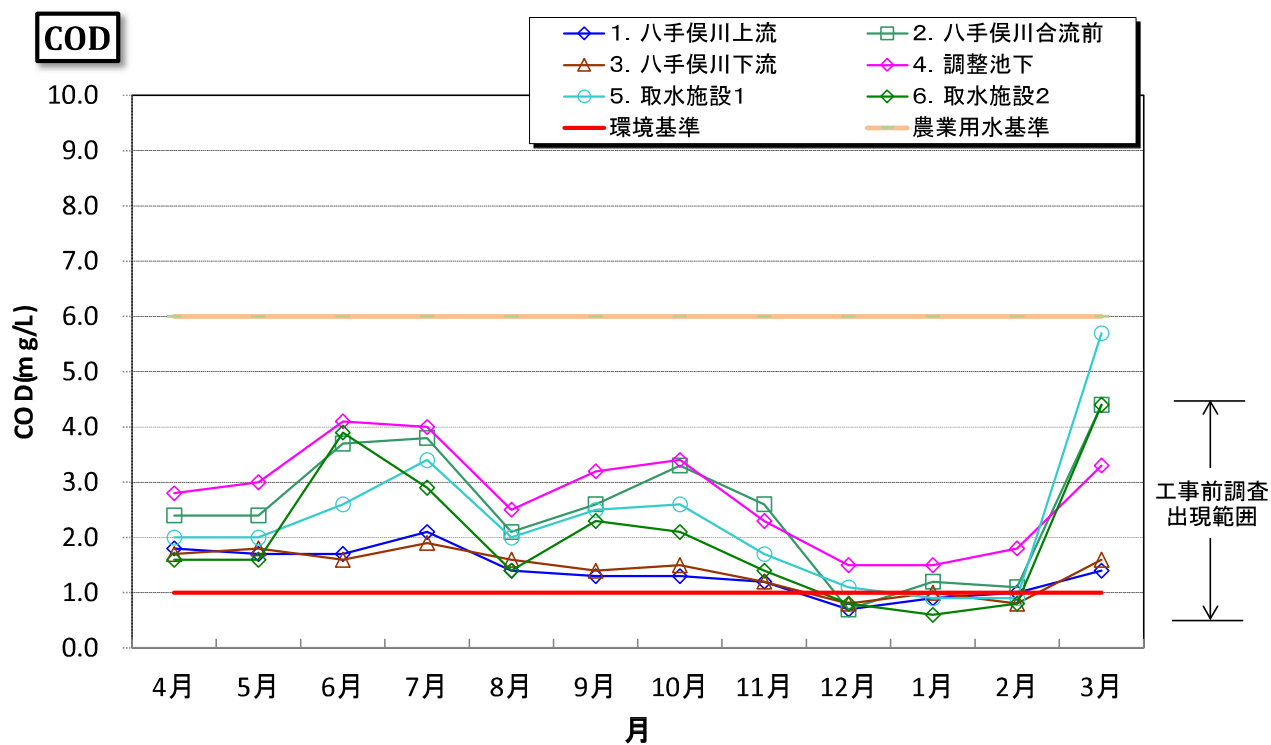


図 4.2.1-5 水質調査結果 (COD)

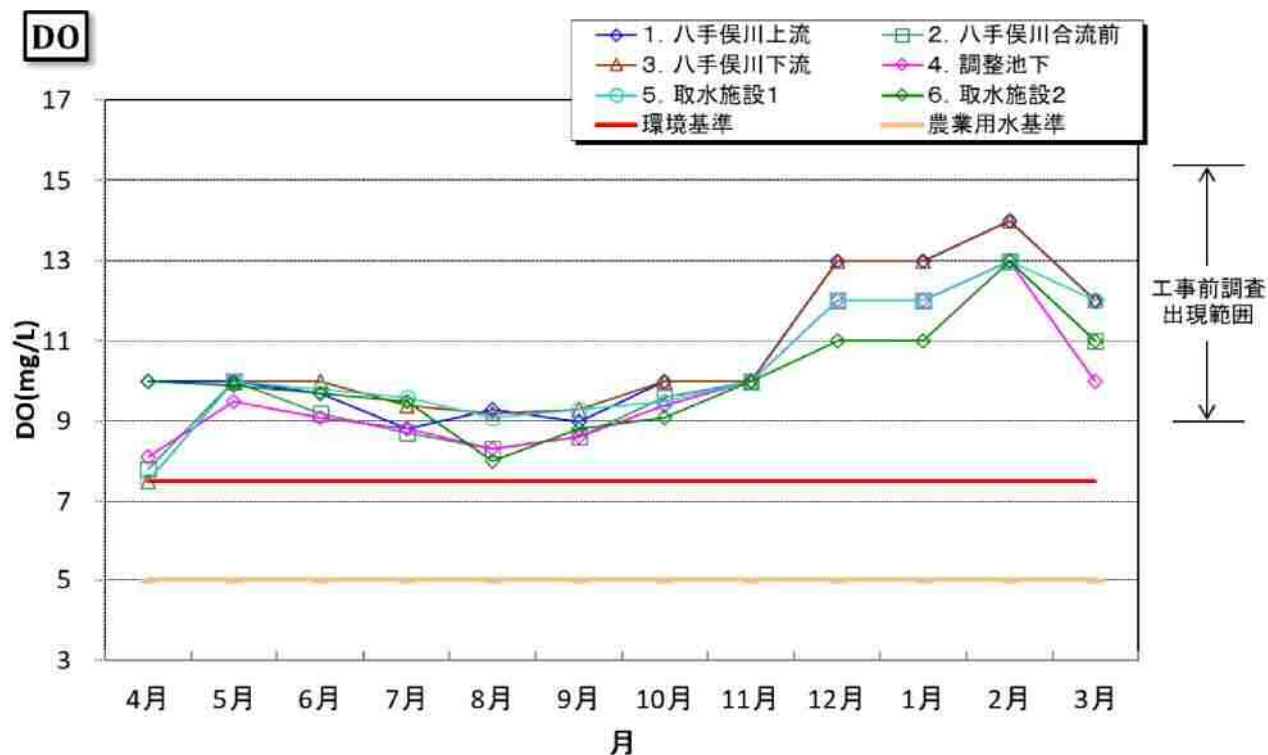
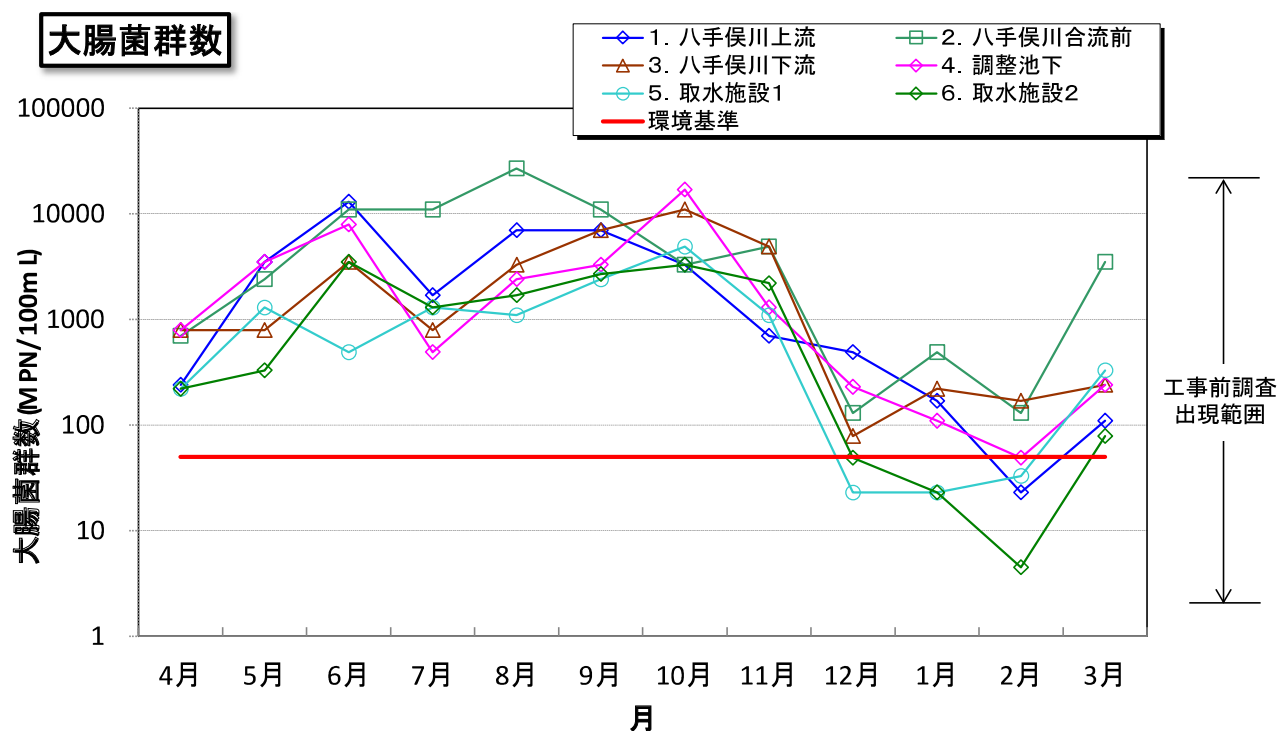


図 4.2.1-6 水質調査結果 (DO)



注) 値が定量下限値未満の場合は、定量下限値として表記した。

図 4.2.1-7 水質調査結果 (大腸菌群数)



図 4.2.1-8 水質調査結果（大腸菌数）

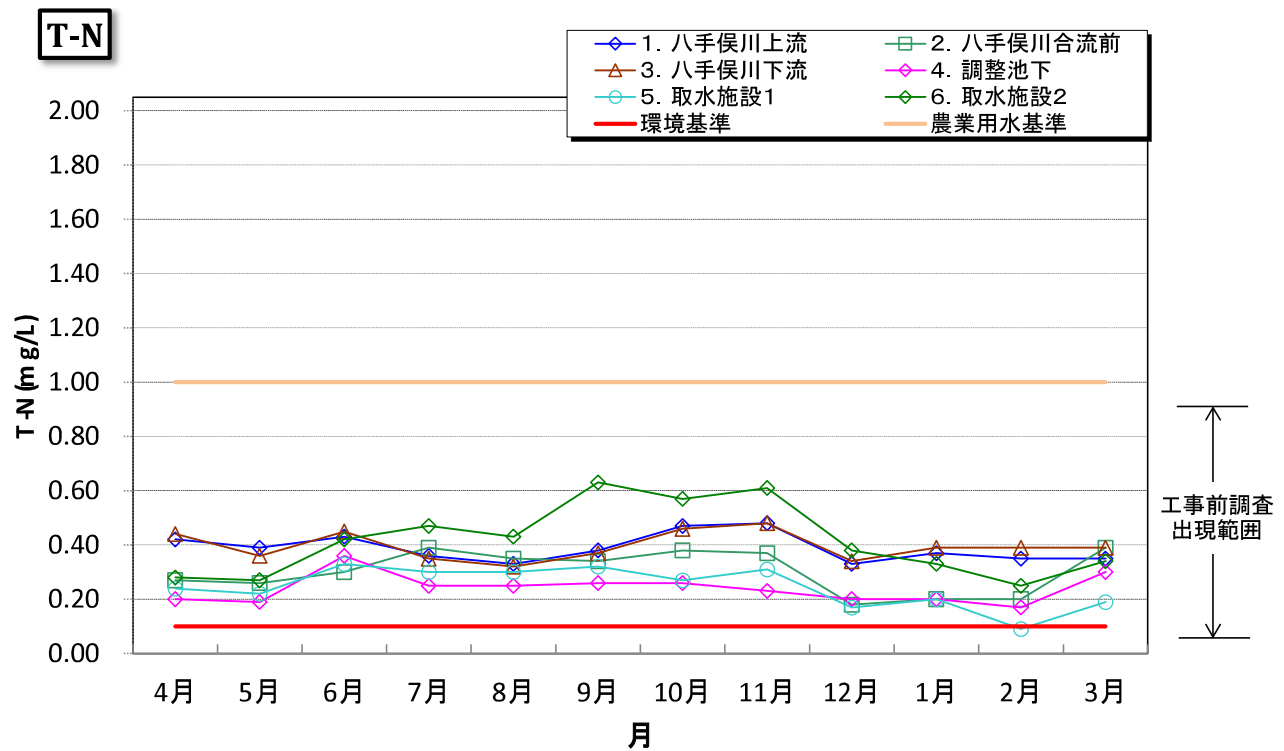


図 4.2.1-9 水質調査結果（T-N）

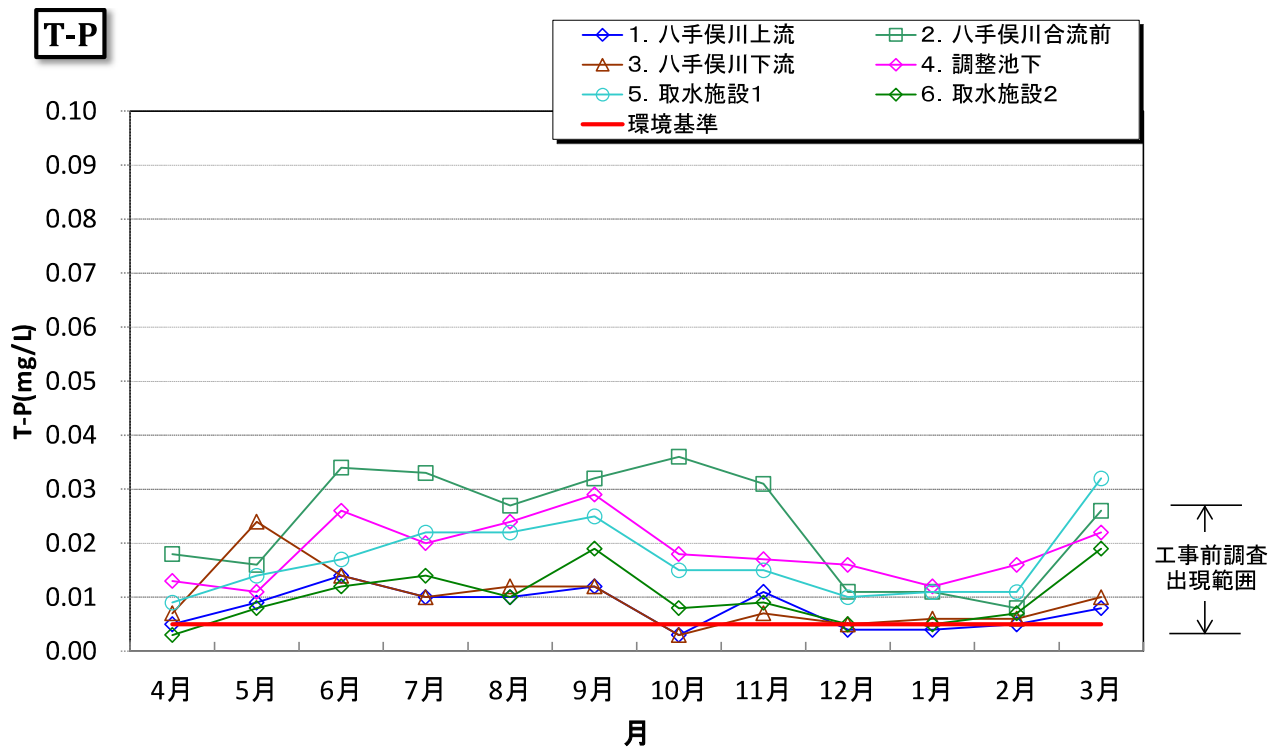


図 4.2.1-10 水質調査結果 (T-P)

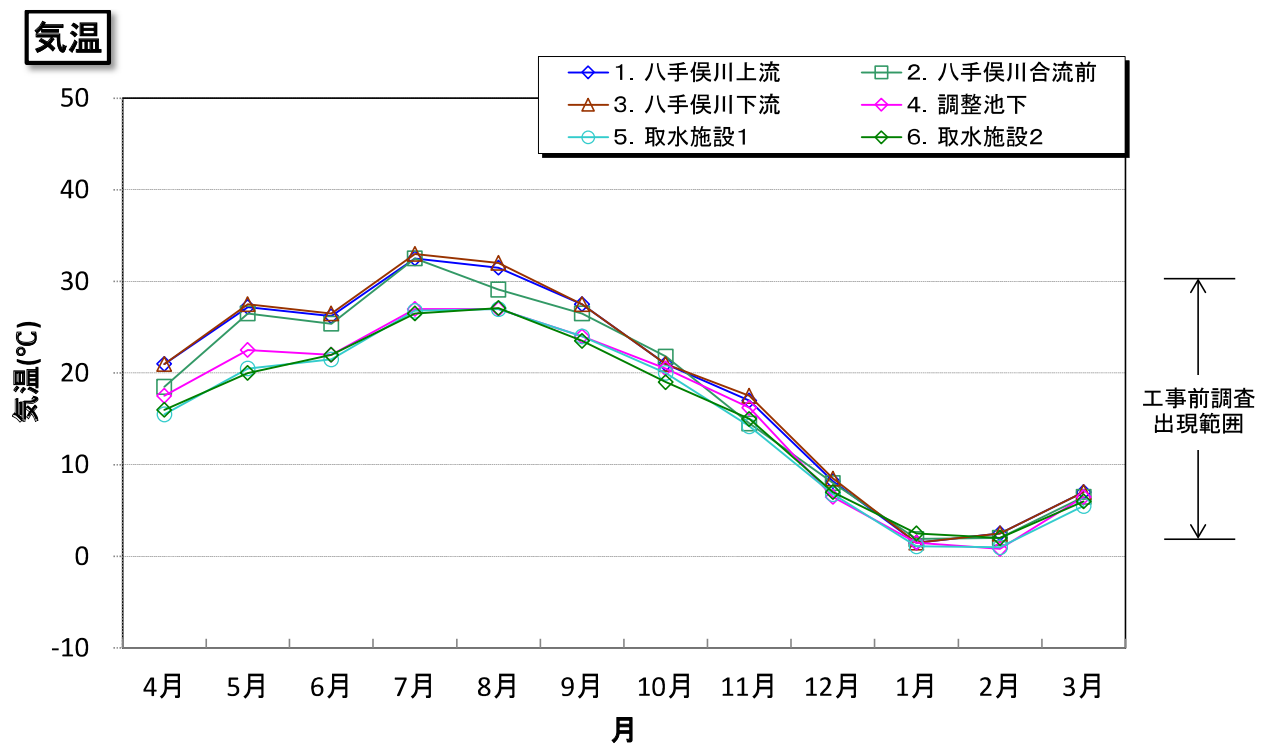


図 4.2.1-11 水質調査結果 (気温)

水温

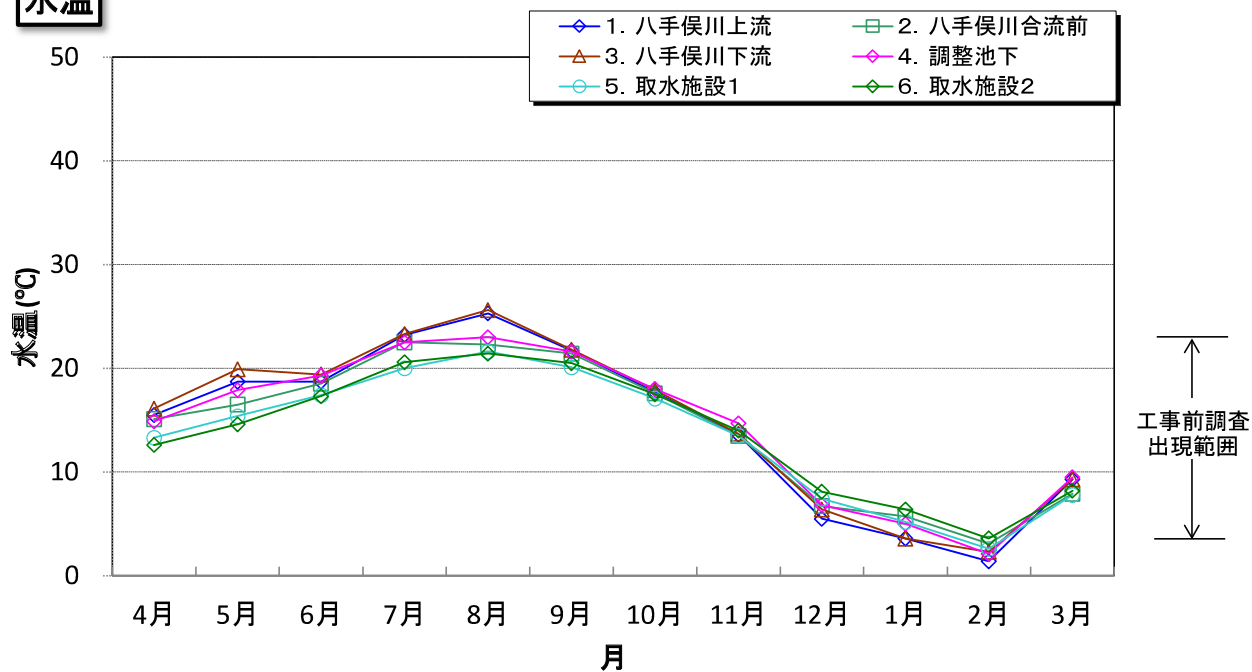


図 4.2.1-12 水質調査結果（水温）

EC

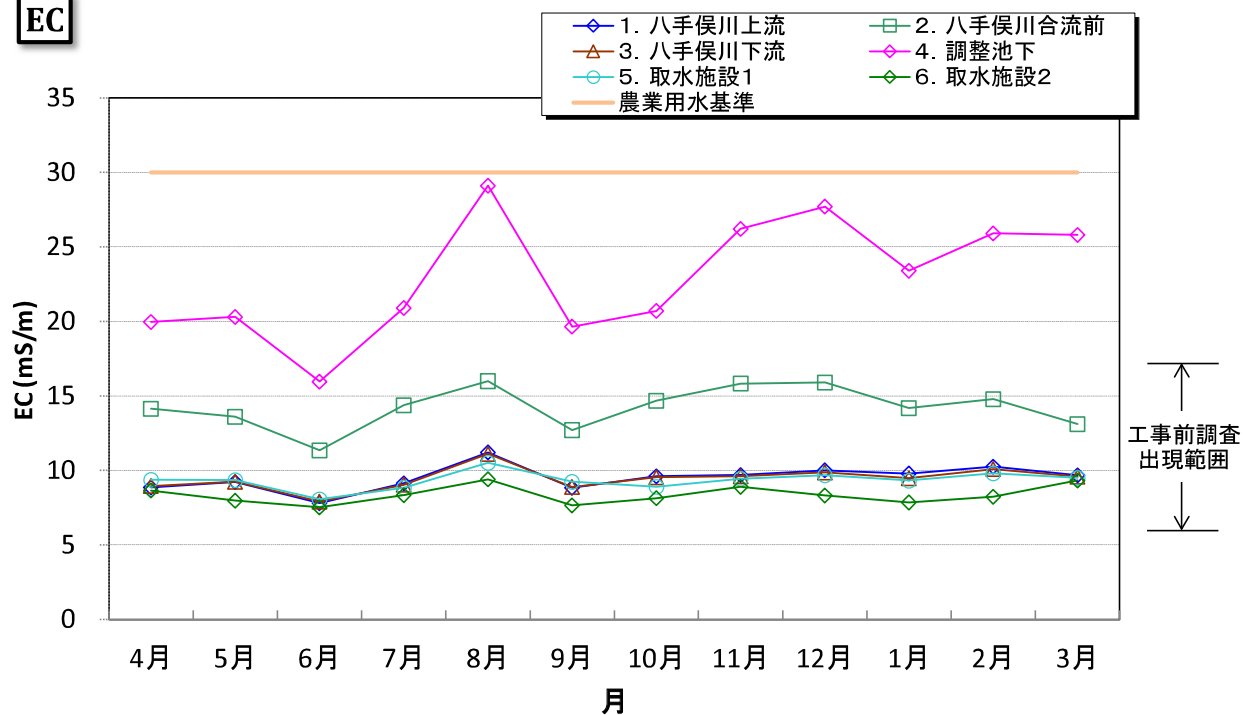


図 4.2.1-13 水質調査結果（EC）

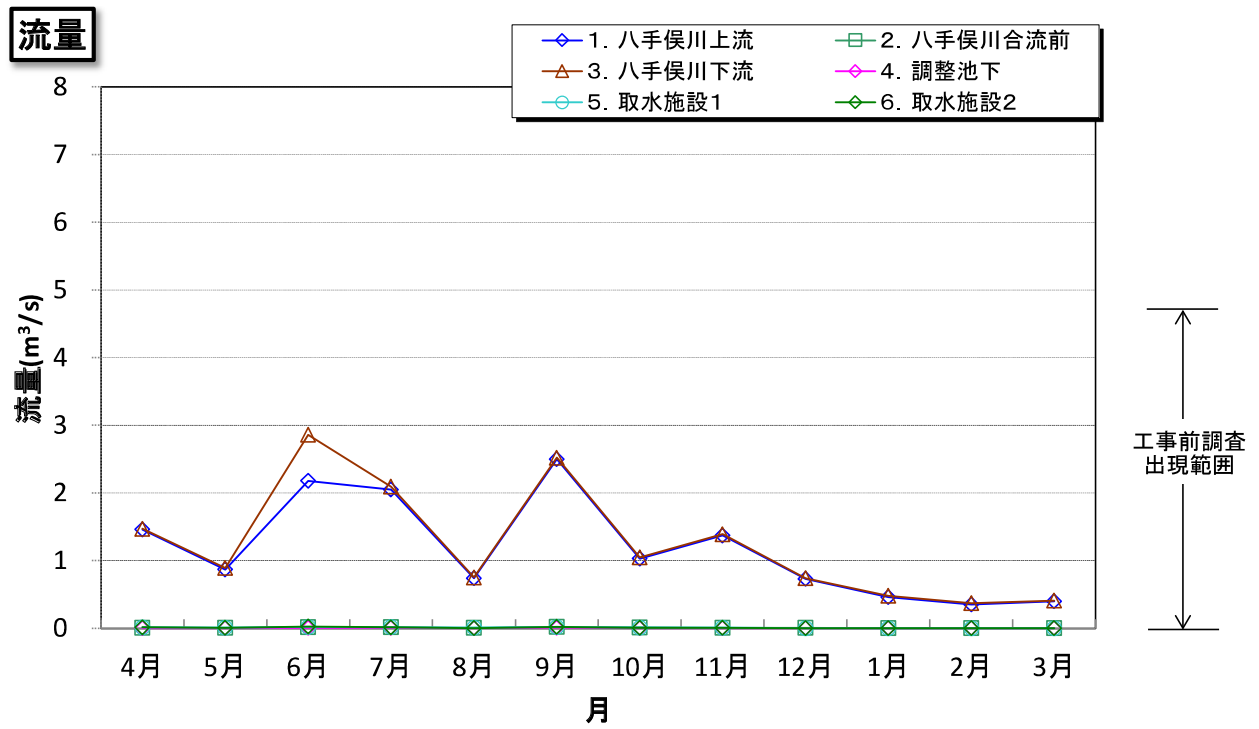


図 4.2.1-14 水質調査結果（流量）

(6) 事後調査の結果の検討

a) 検討内容

事後調査の結果の検討は、評価書における予測値等との比較により行った。

b) 検討結果

① 評価書等との比較

【コンクリート打設工事及び地盤改良によるアルカリ排水の影響】

今年度の事後調査（2024 年度事後調査）の結果と評価書における予測値等との比較を表 4. 2. 1-4 に示す。

今年度の事後調査結果を評価書における予測値と比較すると、予測を行った 2 地点ともに予測を上回る値がみられた。

環境基準と比較すると、全ての地点において、環境基準の範囲内であった。

工事前調査の結果と比較すると、4. 調整池下では工事前調査の範囲よりも高い値で推移した。6. 取水施設 2 ではすべて工事前調査の範囲内であった。その他の地点では、一時的に高い値を示したが、概ね工事前調査結果の範囲内であった。

表 4. 2. 1-4 水質調査結果（pH）と評価書における予測値等との比較

地点	工事前調査の結果	予測値	2024 年度事後調査結果	環境基準
1. 八手俣川上流	6. 8～8. 4	－	7. 5～8. 1	6. 5～8. 5
2. 八手俣川合流前	7. 0～7. 8	7. 3～7. 4	<u>7. 6～7. 9</u>	
3. 八手俣川下流	7. 1～8. 2	7. 7	7. 7～ <u>8. 4</u>	
4. 調整池下	7. 2～7. 8	－	<u>7. 9～8. 2</u>	
5. 取水施設 1	7. 2～7. 7	－	7. 6～ <u>7. 8</u>	
6. 取水施設 2	7. 0～7. 7	－	7. 4～7. 7	

注 1) 評価書調査では、八手俣川合流前（地点 2）、八手俣川下流（地点 3）で予測が行われている。

注 2) 環境基準は「河川 AA 類型」の基準値を示す。

注 3) 下線は予測値を超えた値、強調は工事前調査の範囲外の値であることを示す。

【土地の造成工事及び工事用道路等の建設に伴う濁水の影響】

今年度の事後調査の結果と評価書における予測結果等との比較を表 4. 2. 1-5 に示す。

評価書では、造成工事に伴う裸地面が最大となる時期における降水量が 1. 96～35mm/h とした場合に、3. 八手俣川下流での SS 濃度が 140～1, 200mg/L、4. 調整池下での SS 濃度が 49～223mg/L となるとしている。

事後調査結果を評価書における予測値と比較すると、2 地点とも、予測以下の値であった。

工事前調査の結果と比較すると、6 月及び 10 月に 2. 八手俣川合流前、7 月に 6. 取水施設 2 で高い値を示したが、それ以外は工事前調査結果の範囲内であった。

環境基準と比較すると、全ての月・地点で環境基準の範囲内であった。

表 4.2.1-5 水質調査結果（SS）と評価書における予測値等との比較

単位：mg/L

地点	工事前調査の結果	予測値	2024 年度 事後調査結果	環境基準
1. 八手俣川上流	<1～ 2.8	－	<1～2	25 以下
2. 八手俣川合流前	<1～11	－	<1～ 13	
3. 八手俣川下流	<1～ 2.1	140～1,200	<1～2	
4. 調整池下	<1～16	49～223	<1～7	
5. 取水施設 1	<1～ 8.1	－	<1～6	
6. 取水施設 2	<1～ 4.6	－	<1～ 5	

注 1) 評価書調査では、3. 八手俣川下流、4. 調整池下で予測が行われているが、降雨時の濁水を対象とした予測値であり、ここでは参考値とする。

注 2) 環境基準は「河川 AA 類型」の基準値を示す。

注 3) **強調**は工事前調査の範囲外の値であることを示す。

② 考 察

【コンクリート打設工事及び地盤改良によるアルカリ排水の影響】

本事業では、2016 年度より第 1 期工事で完成した施設の一部供用を開始しているが、第 2 期工事については延期により工事を中断している。ただし、法面保護のため 2019 年 12 月にコンクリートの搬入・打設が行われ、2020 年度は盛土工事が行われた。

今年度の事後調査では、4. 調整池下で工事前調査よりも pH が高い値で推移したが、参考とした環境基準（河川 AA 類型）の範囲内であった。

以上のことから、コンクリート打設工事及び地盤改良によるアルカリ排水の影響はないものと考えられる。

【土地の造成工事及び工事用道路等の建設に伴う濁水の影響】

2019 年度以降、第 2 期工事の延期により工事を中断しているため、対象事業実施区域内の一部が裸地のまま残されている。しかし、防災調整池において適切に流量調整を行うとともに、下流への濁水流出抑制を実施している。

今年度の事後調査では、6 月及び 10 月に 2. 八手俣川合流前、7 月に 6. 取水施設 2 で濁度（SS）の値は工事前よりも高くなったが、一時的であった。第 2 期工事の中断によって残されている裸地の下流の 4. 調整池下地点では、すべての月で工事前の値の範囲内であった。

また、全ての月・地点で環境基準（河川 AA 類型）の範囲内であった。予測を行った 2 地点（3. 八手俣川下流、4. 調整池下）ともに予測を超えることはなかった。

3 月に 5. 取水施設 1 で BOD、COD が工事前の出現範囲を上回っていたが、これは採水当日の最大時間雨量 2.5mm（白山地域雨量観測所 記録）の影響により、有機物を含んだ水が流入したことによるものと考えられる。なお、当月以外の調査月では、工事前調査の範囲内であったことから、自然的要因（降雨）による一時的な影響であったと考えられる。

以上のことから、第 2 期工事の中断によって残されている裸地からの濁水は、防災調整池によって適切に処理、流出抑制されており、土地の造成工事等による影響はないものと考えられる。